

小學讀本

叙

T1A1
10
(MO24)

文部省編纂

小學讀本卷

明治八年八月 山口縣父刻

小學讀本卷之一

第一回

凡世界に、住居する
 人に、五種あり、○亞
 細亞人種、○歐羅巴
 人種、○メレイ人種、
 ○亞米利加人種、○
 亞非利加人種なり、
 ○日本人、亞細亞
 人種の中なり、



警古

學幼
校稚

勉師
強匠

覺出
精

一事

人の警古に種々ありとへども、先づ書を讀み、字を寫し、物を數ふことを、學ぶを第一の務めとす。○幼稚のとき、必ず學校に行きて、警古をふべし。○學校に到りては、何事も、師匠の教へに順ひて、只管勉強せよ。何事を學ぶにも、出精まるを第一とす。○出精せられた、多くの事を、覺ゆることなし。一事にても、覺えたるとき、能く氣を附けて、これを忘るべからず。初めより、多く覺えんと、思ふとき、却て忘る。

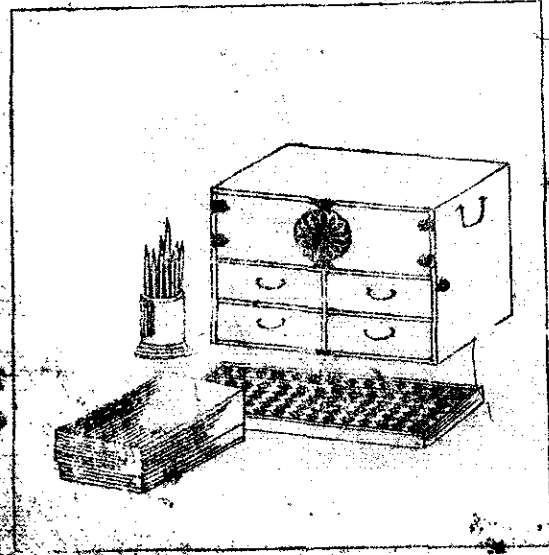
自習日
然急々

寫筆道日
具用

算盤

衣篋書箱文庫
篋筒物庫

こと多く、故に少く充覺え、一事をも忘れず、日々怠りなく、習ふとき、自然と、多くの事を覺ゆべし。幼稚のとき、先づ日用の道具の名を覺え、其用の方を知るべし。○筆、字を寫し、又、面を寫す、道具あり。○算盤、物を數ふ、道具あり。○文庫、書物を、入る、箱あり。○篋筒、衣篋、入る、器あり。



平生食物

又平生食するもの、名を覚えて、これを採へ食物とふに仕方を知るべし。○食物とふべきものに種々あり。

種穀物、米、粟、豆、麥、稷、黍

第一、穀物あり。○穀物は、米、麥、豆、粟、稷、黍の類あり。○此品は、

田畑、炊、燂

皆田、又は畑に作りて、其實をとり、炊ぎて、食物とふし、或は

燒、獸肉、鳥肉、魚肉

燒きて食物とふはあり。第二、肉類あり。○肉類は、獸肉、鳥肉、魚肉の類あり。○此品は、燒きて食物とふし、又は煮て、食物とふ



菓物、葡萄、橙、梨、梅、桃、柿、蜜柑、蜜漬、塩漬

第三、菓物あり。○菓物は、葡萄、橙、梨、梅、桃、柿、蜜柑の類あり。この品は、多く生にて、食物とも。○稀は、蜜漬とふして、食物とも。塩漬あり。

野菜、葉、根、實

第四、野菜の類あり。○此品は、畑に作るものと、野に生むるものあり。○多くは、煮て、食物とふし、又塩漬と、ふむものあり。○總て、野菜は、葉と根を、食物とふす。又、實を食物とも。



士、農、工、別々、幼年、學一般

小學校

世間、賢、思

人の勞めを、種々にて、士、農、工、商とも、皆別々の學文あり、されども、幼年のとき、習ふべき學文を、みふ同トことなり、これを、一般の學文といふ、○この學文を、習とされた、何れの業をも、學ぶこと、能えむ、
故に、人々、六七歳に、至れむ、皆小學校に入りて、一般の學文を、習ふべし、○小學校を、士、農、工、商とも、皆習ふべき、學文を、教ふる所なり、
凡世間の、人々に、賢きものと、愚るものあり、
ども、皆幼推のときより、學校に入りて、能く勉強

讀、已

個、様

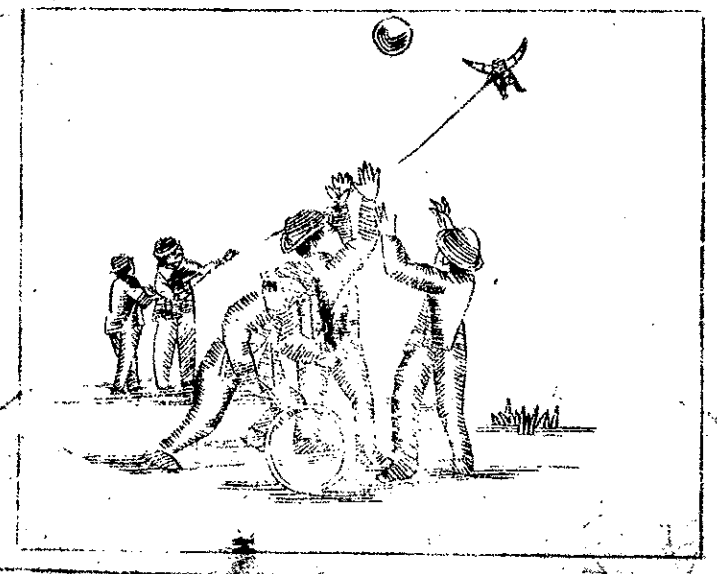
遊、歩、時、間

遊、歩、場、身、動、心、慰、樂

それと、事を、覚えざるものあり、○人一人の讀みて、事を、覺ゆれむ、已む、これを百たび、讀むべし、○人十たび習ふて、事を、知れむ、已む、これを、千たび習ふべし、○個様は、怠りなく、勉強を、此を、必を、事を、覺ゆるものなり、○愚るものにて、多く、事を、知りたれむ、賢き人と、あるものあり、
學校にありて、替古まるものあり、必を、遊歩の、時間あり、○此時間にて、遊歩場に出で、思ひの、に、遊歩して、身を、動かし、心を、慰むべし、○勉強を、ること、あれむ、遊歩するも、樂みあり、

遊歩を樂みと思へ、舊古の時間と、怠らむ、勉強
 せべし、

男遊戯危輪
 遊歩場に出で、男兒の遊
 び戯るゝことと、種々ふれ
 ども、總て、危き遊びを、おそ
 べうらむ、○輪を廻えし、又
 ち、肌を揚げ、又ち、球を投ぐ
 るふどを、宜しとて、○相集
 りて、遊ぶときと、自分も樂
 み、朋友をも、樂ましむべし、



女子異馳
 女子の遊ひと、男兒と異りて、
 馳け走るふどの、遊びを、おそ
 べうらむ、○朋友と、遊ば合ふ
 て、遊ぶときと、馳しく親みて、
 何事も、物知らぬに、おそべし、



第二回

我等、我等を河の中に、行くと欲す、○我等の、此河の
 中に入るを見よ、○私と、汝と共に、此中へ入らん
 と欲す、○汝も、好むことあらむ、此中へ行くべし
 ○我等も、皆此中へ、入ることを得るや、○汝も、今

深水

今、遠く、陸、乾、淺

敵

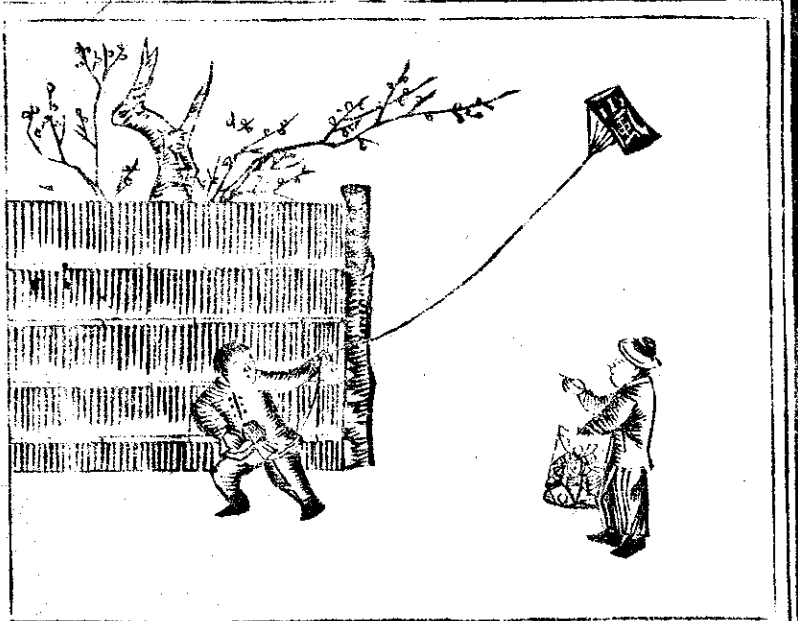
深水に入らんと欲する
 や、○汝も出づることを
 得べきや、○今汝も、濕ふ
 たり、○遠く、渉るべから
 ず、○陸へ上りて、乾すべ
 し、○今汝も、この小舟に
 乗らんと欲す、や、○汝
 も、この小舟の、動くを見
 よ、○小舟に乗りて、走る
 べうらた、



新彼

空中

登、糸、水、懸、帽、破



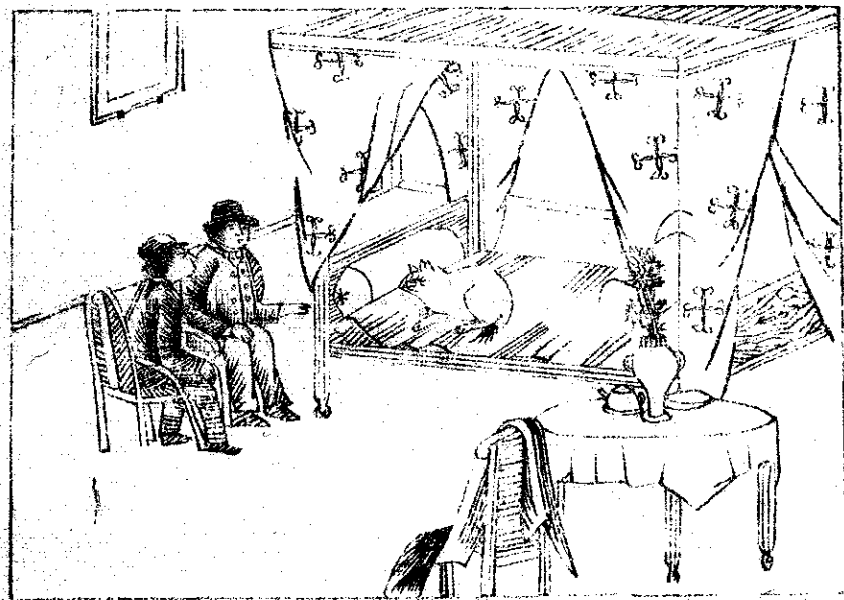
此小兒も、新き風を持て
 り、○彼れ、又、風を持ちて、
 走るを見よ、○彼れ、又、風
 を空中に飛をせんと思
 へり、○汝も、風を揚るを
 見んと欲す、や、○風が
 空中に登りたるとき、心
 を用ゐるべし、○糸の水
 に懸ることあり、

彼れも、新き帽を持てり、○彼れ、の、古き帽と、破れ

許

部留此餘嚙
屋 所所

載手退追



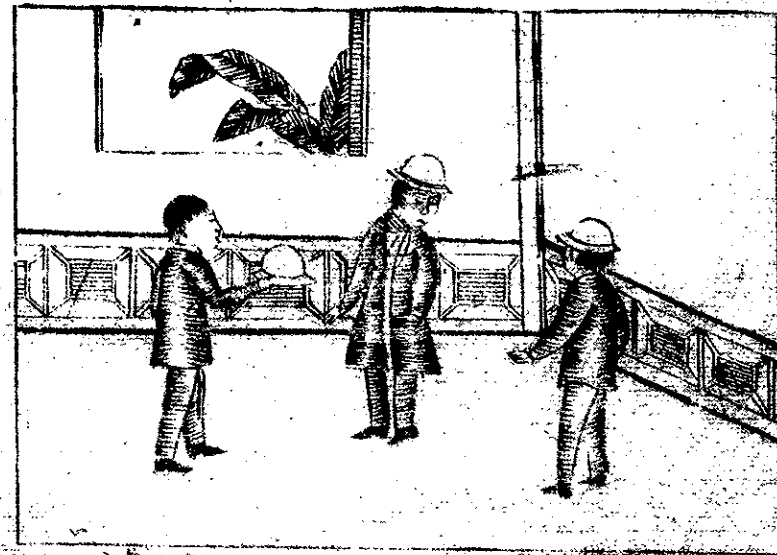
猫にあらす寝床の上
 に乗れり。○汝え猫を、追
 ひ退くるや。○私の手を
 載するときえ、猫が私を
 噛むべし。○猫を、餘所へ
 行くべきや。又え此所に
 留るべきや。○猫を、此部
 屋の中に、留るといへど
 も、寝床の上に、来るを許
 さず。○汝え、猫が、鼠を捕

着猫寝
床

彼被頭小瀧
人、兒、

新喜

たれを此ゆゑに、喜んで、新
 きものを持って、り。○新き帽
 にも、能く心を用ゐるべし、
 又それを瀧すべからず。○
 一人の小兒も、頭に、帽を被
 ぶれり。○私の帽も、古きゆ
 ゑに、彼人も、私に、新き帽を
 持てと云ふ。○此小兒も、其
 きマントルを、着たり



此猫を見よ。○寝床の上に、居れり。○これえ、よき

善終熱長
日日

蹴球堅柔 人賞優



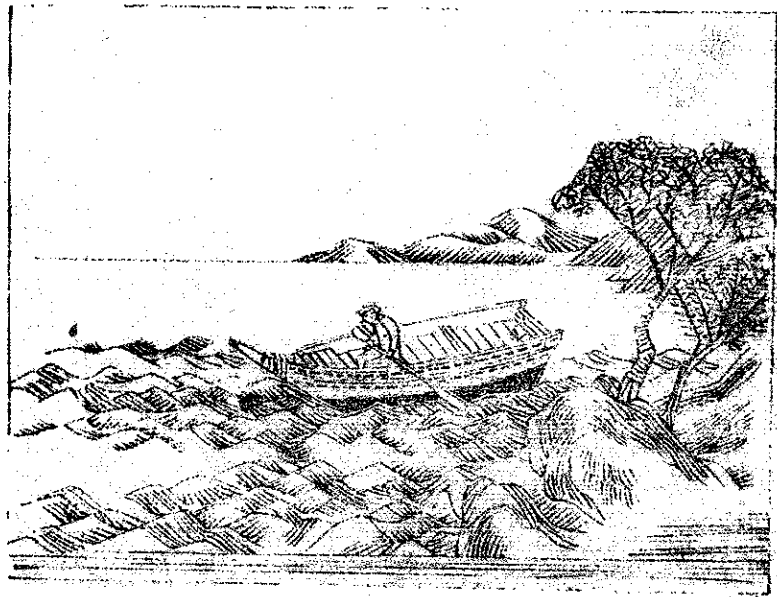
に、長く遊ぶべからず、強き熱さに觸るべから

彼れん、球を蹴て遊べり、汝え、
それを見しや、○私を、棒を以
て、球を打つを見たり、其球を
堅きものなるや、○此れを、柔
かなる、球なるゆゑ、人に當る
とも、傷けることなし、○小兒
等も、球遊びを好めり、○それ
を遊ぶに、善きことなるれども、
終日遊ぶべからず、又熱き日

湖漕
水

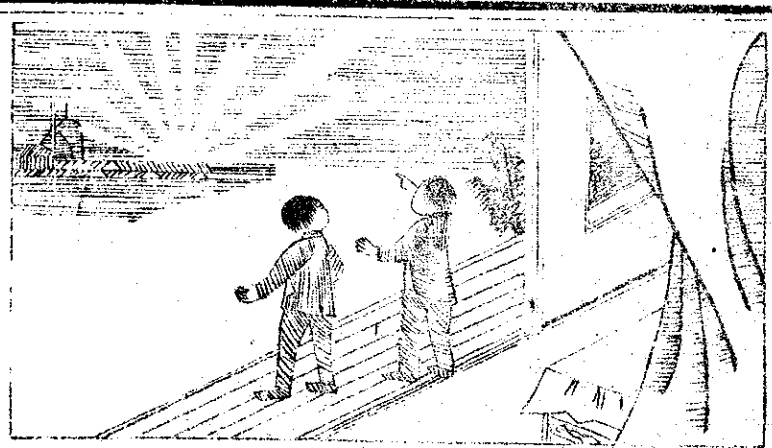
如何、
何

るを見しや、○それれん、大なる鼠にあらざ
汝え、小舟に乗りたる、人
を見しや、如何にして、彼
れを、小舟を動かすや、○
彼れを、櫂を以て、小舟を
漕ひり、○小舟を、湖水の
中にあり、○魚を、湖水の
中に、ありといへども、深
水に、あるゆゑ、見るこ
と能はず



白紙

身害大登起時
陽出刻



突然るときは身を害ふものなり、

大陽の登りたるときは、我等の
起き出づべき時刻の來れりと
知るべし。○大陽の登りたると
きに、猶寢所に臥すべからず。○
我等は、大陽を見るときは、日の出
を見ることを得ず。○汝も、大陽
の赤きときを見しや、大陽の赤
色なるときは、多く早すること
あり

早赤色

樹
海棠
蕾

花開
奇麗

これは何の樹なりや。○そ
れは海棠の樹なり。○汝も、
海棠の中に、蕾のあるを見
しや。○此樹は、赤き蕾にて
満てたり。○私に、蕾を取
り得べきや。○それを今
取るべからず。○今暫く過
ぐると、其蕾は皆花を開き、
奇麗なる、赤き海棠となる。
其とき、汝も、海棠を取るべし。



牝雞 養食汝速食
老餌

否

彼鳥 籠女



第三回

彼夕、鳥を捕へて、鳥籠に入れたり。○汝も、彼鳥

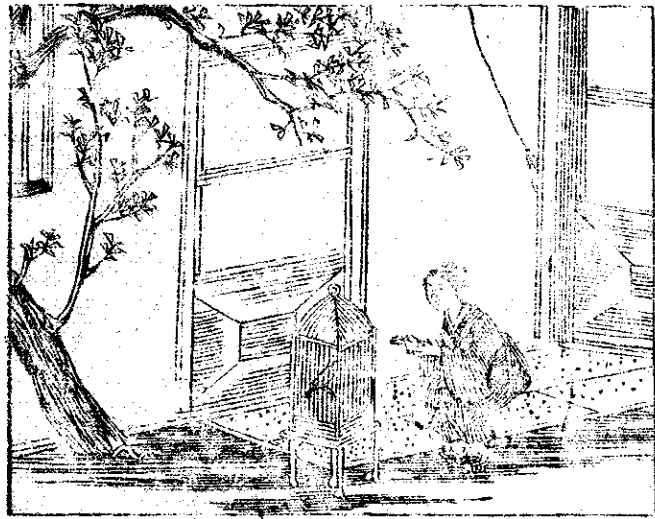
彼人、牝雞を養ふ爲に行き
たり。○汝も、牝雞の食餌す
を見しや。○汝も、老いたる牝
雞の、速々に食するを見しや。
○それと、與ふほど、食する
や。○否、それ程多くて食不得
ず。○牝雞も、何を食するや。○
彼れと、穀物を食せり、

彼飼 暴馴鳥

以前 歌聞好

又跳 飛

枝 息



を飼ふを見しや。○此鳥、馴れたりや。又も暴る
ことありや。○此鳥、今も、馴れたりといへども
以前も、よく暴れたり。○汝
も、鳥の歌を聞くことを好
むや。又好まざるや。○松も、
歌を聞くことを好み。又尚
鳥を見ることを好め。○
鳥も、跳るや。又も飛ぶや。○
これと、木の枝へ飛ひ上り、
又木の枝に息へり。○此鳥

路迷 否子 彼子 森中 通恐 任母 彼母 導安 家全



導きて、家に在ると、同一く安全なり。○若家に歸らんと思ふとき、歸ることを得べし、

けり。○彼等二人、路に迷ふべきや。○否、彼子、能く路を知るゆゑに、彼等二人、路に迷ふことなし。○彼等、森の中を通るを恐るや。○否、恐ることなし。○彼の母、彼れに任したるゆゑに、彼子、小女を

再歸 小惡 兒 遠具 小善 兒 彼女 信切 倒

籠より出づることを好むや。○若籠より出づるとき、再び歸り来るや、又を飛び去るや。

我、惡き小兒を好まず、且これを遠ざけんとす。○惡き小兒たりとも、好むことありや。○善うらざる小兒にても、傷くることなし。然れとも、これと共に、行くことを好まず。



彼れ、彼小女の爲に、信切なりや。○然り、彼れ、信切にして、彼小女の倒れざる爲に、手を取て、導

杖老人

置息路傍

難何歩屈體老年白顔
起故行 年老髭

汝え、老人の杖を擧ふるを
見—や、○何に由て、彼れを
杖を用ふるや、○彼老人え、
路傍の石の上に息ひ、其手
を杖の上に置けり、○彼れ
の顔と、白髭あるに由て、彼
此の年老いたるを知り、又
老年に由て、體の屈みたる
を知れり、○老人も、杖を擧て歩行す、杖なくして
何故に歩行—難きや、○彼れも、起つことを得べ



きや、又も歩行することを得べきや、○彼れも、起
つことを得、又歩行することを得るといへども
速々に、走ること能はず、

善顔人

茲



茲に、四人以上の人あり、○汝
と此人の、年老いたるを知る
や、○此人も、皆手に杖を持ち
たり、老人と同しく、年老いた
り、○汝も此人を善き人と思
ふや、○此人の顔も、善人なる
べし、○此人も、白き髭あるを

小徳賣不象之一

上 百位集一丈

簡様

笛

喇叭

常

多に、老人あるべし、○我等も、簡様なる顔を知り、



彼等の持ちたる、笛の名を、知
何なるや、○此を、喇叭なり、
○彼等も、老人あるや、○否、彼
等も、老人にあらず、○皆小兒
なるや、○彼れも、小兒にあら
ず、少年なり、○彼等常に立ち
て、坐ることなきや、○彼
等皆手に、簡を持てり、

幅紗

否、巻物

誠得

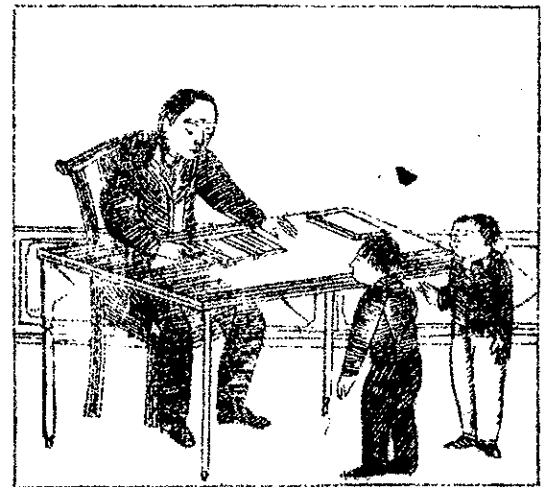
墨壺、筆、見

汝も、此人の幅紗の中に、何を
持つと思ふや、○それと水な
りや、○否、巻物なり、○何の巻
物なるや、○汝も、其巻物なる
ことを、説き得るや、○汝も、此
人の、目を見たりや、○彼の、の
目も、巻物を見たり、○其外、汝
も、何を見たりや、○我も、墨壺と、
筆を見たり、○此人も、筆を操りて、巻物に書し、其
巻物を讀むこと、本を讀むが如し、



良我愛

色教誡示 々



色々の教へを説き示すことあり、

汝を此小女子を見しや○何ゆゑに彼れを其手を揚げしや○彼女を鳥を入れたる籠を持ちたる然れども彼女を心を用ゐること宜しからず

良き老人も我が好みに従ひて我に聽けしむるや○彼れを小兒を愛するや○然り彼れを善き小兒を愛すされども更に惡しき小兒を愛することあり○善き小兒なれば

速去 去

して鳥を養ふこと能はざるゆゑに鳥を彼れが持つや否や速く逃げて去りたり○鳥が逃げ去りたる時森の中に飛び入りたり○此とき彼れを手を揚ぐるとも何の用にも立ちがたし○彼鳥を飛び去りたり汝再び捕ふこと能はず○彼れを鳥籠に心を用ゐることなく又鳥を養ふこと能はざるゆゑに我を鳥の逃げ



自由

巢造 鸚鵡 棘間 頭總

たふを喜べり○鳥を自由なることを好めり



誰う鳥の聲を聴くことを
好まざるや○汝も亦鳥を
見ること好まざるや○
鳥を木に在ることを好み
て、巢を造り、兒を養育す○
鸚鵡を小鳥なり、棘の間に
巢を造れり○かゝる鳥を
に總あり

第四回

人形 大輪 切

廻

此女子を愛らば、人形と輪を持てり○汝を輪
と人形を好むや○汝も人形を大切に弄ぶや○

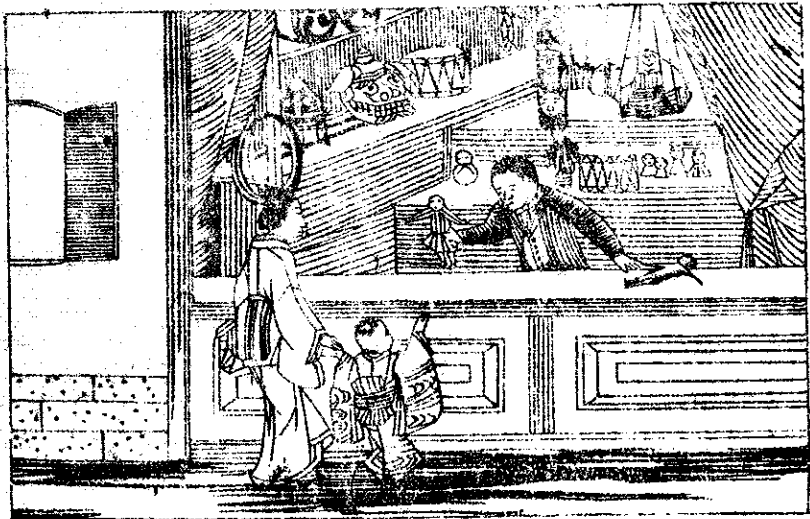


汝も人形を舞へ得るや○此
女子も輪を廻らす爲に棒を
持てり○輪を速くに廻らす
にも速くに走らざるを得ず

此女子、小兒を愛すとおもふや○又小兒も此女
を愛するや○汝も此兒の美しき顔を見たりや
○此女も甚だ此小兒を愛す○又小兒も此女を
愛すること、思ふ○我も此美しき顔よつきて

五十一 五十二

指示 危 娘 傷

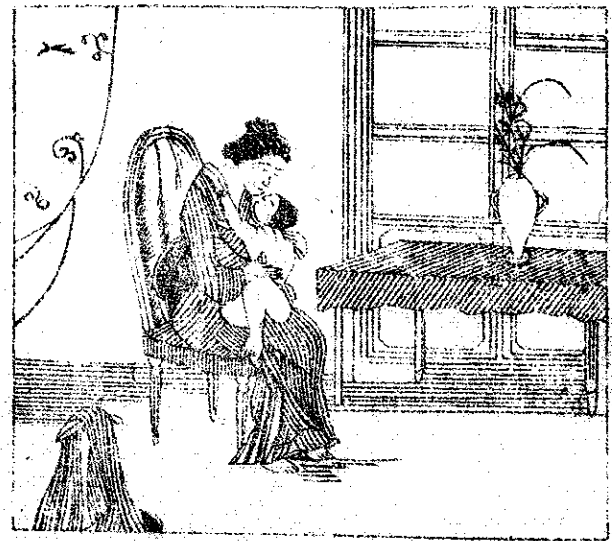


打るやと問ふに小兒を、自
 ら好む人形を指し示せり
 ○此小兒を人形をかり弄
 びて飽くとき、輪を弄ぶ
 ことを好むべし。○其外、店
 に列ねたる品も、皆小兒の
 好むものなり。○此小兒
 をよき娘をれを只人形の
 みを愛し、能く心を用るで、
 傷むることなし。

買 簡物屋 曲 店

説 長 卷 縮 髮 裸 矩 合 體 氣 凍 暖

説うん、○彼れも、長き髪あ
 り、○其、卷縮する、矩合を見
 よ、○彼れの足も、裸體なれ
 ども、此所も、暖氣なるゆゑ
 に、凍ゆることなし。○汝も、
 此兒の名を知るや、○否、我
 ら、其名を知らず。



母が小兒を携へ、人形を買ふ爲に、小間物屋に
 行きたり。○汝も、此店に多くの小間物のあるを、
 見たりや、○母が小兒に向ふて、何れの人形を求

泉終日古木

圓浪

馬走

静



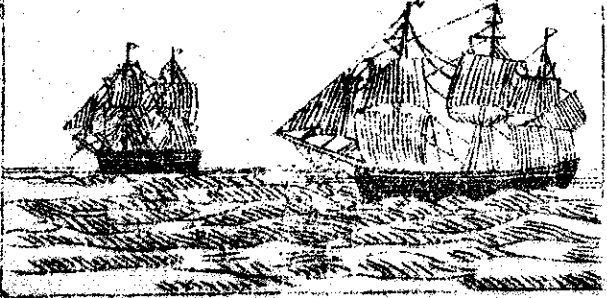
泉を終日古木の枝にまわりて、夜に入ると、始て飛び去る。○これ大なる鳥にて、大なる圓き眼あり。

馬に乗りたる人あり。○如何に彼れを早く走るや。○汝も馬に乗ることを好むや。○私も馬に乗ることを好むりさ。○れども、彼れの如く早く走ることを好まず、馬を静々に歩



鞭 後向 茲小 船 二水 大船 帆 渡海 浪風 吹

ますことを好むり。○何故に、此馬を早く走るや。○彼人々、馬を鞭うつゆゑに、早く走れり。○此人の後へ向きたるを見よ。○彼れを、水を見るなり。茲に小船と大船あり。小船にも、二水橋あり。大船にも、三水橋あり。汝も、橋を見よ。や。○汝も、橋の上なる帆を見よ。や。○汝も、小船に乗りて、海を渡るを好むや。大船にて渡るを好むや。○風吹きて浪の立つ



渡海 陸 蒸氣船 帆舞船 暴風 海上 有様 難儀 軍艦 商船

ときに、我も船に乗りて、渡海するを好ます。○我
 ら、風の吹くときに陸にあるを好む。○これ
 蒸氣船なるや。○否、蒸氣船にあらす帆舞船なり。
 見よ、茲に暴風の中に、海上に
 浮む船あり。○撞し、折れ、帆も
 破れたり。○恐ろしき有様な
 りや。○此船も、帆舞船なるへ
 とも、蒸氣船ならむ、斯く難
 儀することあらす。○これ、
 軍艦なりや。○否、商船なり



蓮、葉

肥、上着

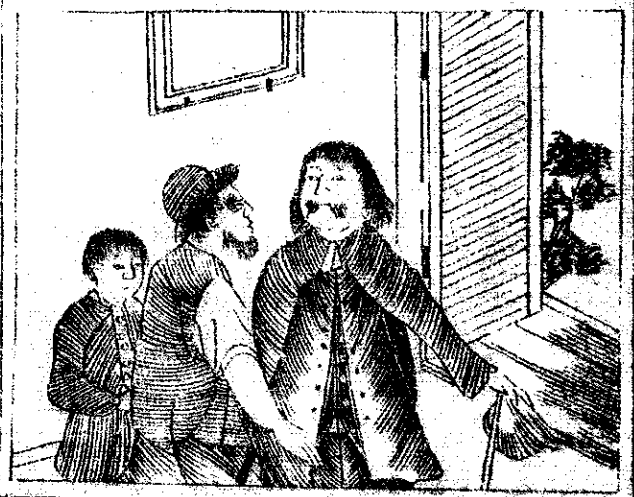


此小兒も、幼年なるゆゑに、水
 中に、深く入ること能はぬ。○
 此小兒も、何をなさんと欲す
 るや。○これ、小き蓮の葉と
 大なる葉を、取らんと欲す。○
 とも、陸より、遠く離れて行く
 とき、水も又深くなるべし、

一人の男も左の手に、帽と杖を持てり。○此人も
 圓き顔にして、肥えたる腮なり。又長き髪あり。○
 彼れも、長き上着を着たり。○此上着も、暖なる

現時 兼部 聞 草積 車 運

べーの帽を被よりたる人、
 上着を着ずして、肘を現えせ
 り、これと、葉をなすゆゑなり、
 ○彼れを、我部屋へ、人の來る
 を喜び、又人の語りを聞くこ
 とを好むなり。○一人の少年も、
 只彼等の、語りを聞き居たり、
 人々、草を積み舉げたり此草の、枯れたるとき、こ
 れを、枯草と云ふ人の、枯草を、車に載せ、これを馬に
 引かせて、小屋へ運び入る、○草の枯れたるとき



小屋 雨 再 牛馬 耳 目 鼻 嗅 香 聲 食 青 見



を急ぎて、小屋へ運び入る
 べー、然らざるとき、雨に遇
 へを、再び満るゝものなり
 ○此枯草を、牛馬の、食とな
 すなり、○馬は、枯草と、麥を
 食すれども、又甚だ、麥を好
 みて食す、

人に、耳目、口、鼻あり、○鼻は香を嗅ぎ、耳は聲を聞
 き、口は食を味ひ、又物を言ひ、目は物を見るもの
 なり、○人は、只一つの鼻あり、一つの口あり、さ

見聞
多分

業多
話少

大鶴
雛色



又人にえ、二つの手と、二つの足とあれども、只一つの口あり、ゆゑに、業を多くなして、話一を少くなすべし。

第四回

鶴も、大なる鳥にて、雛のときも、茶色なれども生

生雪
長白
頸長
色長

高飛
教師
數多
讀書
事物



水中に入り、又高く飛ぶことあり。

教師も學校へ來れり、茲に、數多の小兒と小女子あり。○此等も、皆書物を読み、事を學べり。○學校

長一たるときも、雪の如く白き色となるなり。○この鳥も、長き頸にて、長き脛あり。○此鳥の卵も、大にして白きものなり。○汝常に鶴を見ることありや。○吾常に鶴に見ること少し。○これ

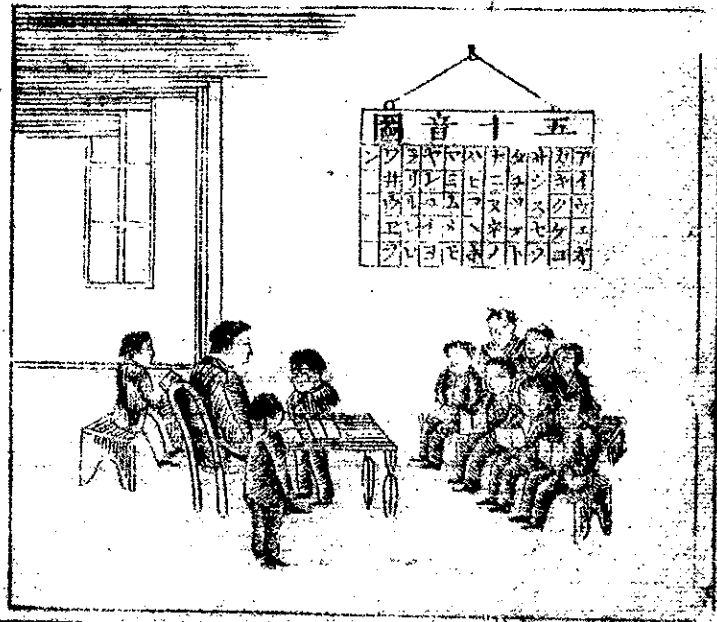
石盤

語綴

日地樹池氷滑
和上

にえ、机と石盤と筆と書
物あり。○汝え、學校へ行
くことを、好むや。○汝え、
書物を讀み、又語を綴る
ことを、能くするや。○私
も、書物を讀むことを好
めども、未だ能く讀むこ
とを得ず。

今日も、寒き日なり。○雪が地上にも、樹にも、池
にも、積れり。○小兒も、氷の上を、滑へることを好



傍、雞、雞、巢、卵



此小兒も、卵の傍へ手を遣れり。巢の中に、六つ
の卵あり。○これ、雞の卵なり。○雞も、巢の傍に
在りて、飛び去らず。これ、卵を取らるゝことを
めり。○此遊びも甚だ危
きものゆゑ、能く心を用
ゐるべし。○も、氷より
落つることあり。身を
傷ふべし。○善き小兒も、
此危き遊びを好むこと
なく。

此小兒も、卵の傍へ手を遣れり。巢の中に、六つ
の卵あり。○これ、雞の卵なり。○雞も、巢の傍に
在りて、飛び去らず。これ、卵を取らるゝことを

鳥、飛、去、ら、ず、こ、れ、も、卵、を、取、ら、る、こ、と、を

二、十、五、音、圖

憂

青薄模
異様

菊
穂梗

憂ふるゆゑなり。○ 雑る部屋の中
に、巢を造れとも、又樹の枝に巢を
造る鳥と、草の中に巢を造る鳥あ
り。○ 卵に白きものと、青きもの
と、薄黒き模様のものあり



菊と桔梗の花あり。○
汝も菊を愛するや。○
小兒も桔梗の花を折
りて手に持ち、娘も大
なる菊の花を手に持

黄色
紺色

数多

棚登糊穀
類

り。○ 菊の花も多く黄色なり。○ 桔梗の花も多
く紺色なり。

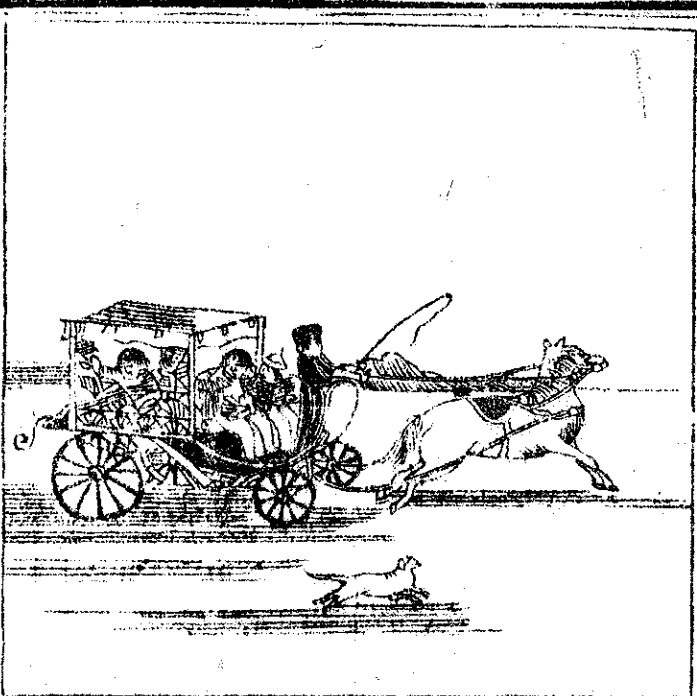
数多の鼠あり。これ又口中
に出づることなし。○ 日の
暮るるとき、直に出で、夜
中に至りて、各々遊び出づ
。○ 此等の遊び出づるとき
も、諸所を歩き、又棚に登り、
糊又穀類を食す。○ 然れども、猫の聲を聞くと、とき
く、一時に静まりて、囁ぐことなく、驚きて、忽ち穴



馬車載

皆我學校

の中へ逃げ入るなり○猫の屏るとき鼠を遊ひ
出づることなり



茲に馬車ありて、數多
の小兒と、女子を載せ
たり○汝も此小兒と
女子を知れりや○然
り、私を是等を知れり
○これ皆我學校の
人なり○彼水の犬も
馬と一緒に走りり○

脱響箱

彼等も汝を見たりや○彼れも私を見るときに
其帽を脱げり、我も彼れを見るときに、必す帽を
脱がざることなり

此箱のうちに響きあり○汝
もこれ、何の響きと思ふや
○此箱の中にあるを、鼠又を
猫なるべし汝も、何と思ふや
○此響き、甚だ小なるゆゑに、
私を、小き鼠なりと思ふ、猫に
もあら、大なる鼠にもあら



神明話

長敬 我身 幸願 善道 時候



茲に、四人の小兒あり、其中二人を坐し、他の二人も立てり。○一人の老人ありて、此小兒等に、神明の話を聞かせり。○又老人の云ふにも、總て小兒を、神明を畏敬して、我身の幸を、願ふむと、ならむ、善き心を持ち、善き道を行ふべし。○小兒のとき、春の時候の如

智慧の種を蒔く

生長 壯年 働 冬 時 候

遊戯

正に我心に、智慧の種を蒔くとき、なり、智慧の種を蒔くとき、學文することなり。○生長して、壯年に至れむ、人間の働くべき時と、思ふべし。○老年に至れむ、冬の時候の如し。茲に、手に杖を携へたる、老人あり、足も不自由にて、目も暗くなれり、されども、此老人も、一時を小兒にて、其時を、今の汝等の如く、早く走り、又遊び戯れたり。



冬の時候

遊戯の時

足、震、肩、倚、春

榎、六、年、横、離、水、輪、目、切、木

○今も、足も震へるゆゑに、小兒の肩に倚りて、此
ルが爲に、導りたり。○見よ此老人も、冬の時
候の、至れるなり。○汝等も長く、春の時候にもある
べからず、必ぎ此老人の如くなるべし。

茲に、榎の大木あり。○汝も此木の年を経たる、數
を知るや。○今此木を、横に切り離して、木目の輪
を數へ見るべし。○木目の輪も、一年に、一つ充
ずものなれむ。輪の數に
て、此木の年を経たる數
を知るべし。○此木も、今



其、種、初

天津神、再、拜、昨、夜、無、難、大、幸、今、朝、父、母、息、災、多、過、天、道、給、道、免、謝、災、母

人によりて、枝を空に至るといへども、其初めを
僅ら一つの種より生じたるなり。其種に至る小
きものにて、汝の手に、持ち得べきも、あり。



天津神、再拜、昨夜も、無難に過ぎて、大幸なり。今朝
夜明けて、光りを下し給ふによ
り、父母の息災なる顔を見るこ
とを得たり。多謝。○私を導き給
へ、幸を與へ給へ。も、過ちあ
を、免し給へ。○私の死するとき
も、天道へ導き給へ。拜。天津神と

主神高皇產靈神神皇產
靈神天照大御神を云ふ

濱邊

網引

良惡皆
一同

捕

此人等も小舟に乗りて濱邊に入り網を以て魚
を捕りたり。○濱邊に網を
引くとき、これに懼りた
る魚も大なるも小なるも
又良きも惡しきも皆一同
に捕ふることを得るなり。
○汝も茲に三人の男ある
を見しや。○又彼等も數多



海水

二匹
大魚
網入

の魚を捕りたるを見しや。○海水の中にも多分
の魚あれども中に良きものと惡しきものとあ
り。○一人の男を惡しき魚を二匹海中へ投げ入
れたり。○又一人を屈みて大なる魚を網に入る
所なり。○汝も二つの網あるを見たりや。○此
網に魚を入れて満ちたるとき、我が家に持ち
歸るなり。

此處
場所
花園
美花
設

此處を如何なる場所と思ふや。○此處を花園を
り。○茲に數多の美しき花あり。○此愛らしき小
兒と娘との遊び場所に設けたりと思ふや。○汝

百子

歟

籠瓜

猥物

積棚葡萄



此小兒等を喜んで遊ぶと思ふや、○左の手に、歟を持ち、右の手に、帽を持ちたる小兒あり、○小兒の後に、杖を持ちたる、娘あるを、見よ、○一人の娘も、瓜を入れたる籠を持ち、てり、○汝も、花園に行きて遊ぶとき、猥りに花を折り、菓物を取るべからず

茲に葡萄の棚あり、○一人の男を葡萄を積み入

腰州

膝上

房

此男

花折



此、籠を持ち、○又腰を掛けたる、一人の女あり、其膝の上に小兒を抱けり、○小兒の兄を、立ちて、葡萄の房を取れり、



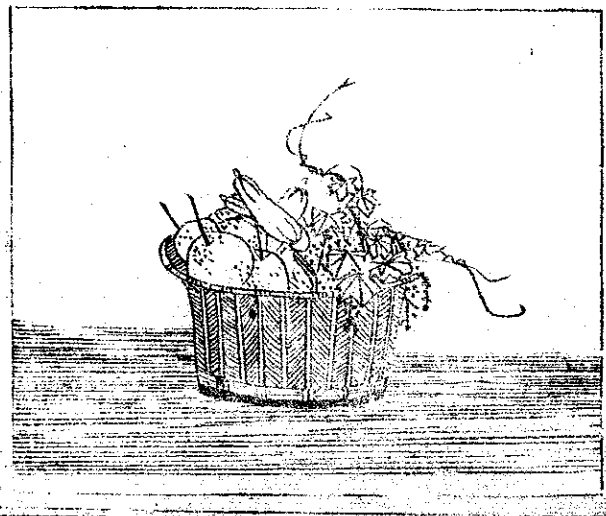
此男も、花園を作る人なり、○傍らに、小兒あり、○此人も、小兒等に向て、猥りに、菓物を取るべからず、又花を折るべからずと云り、○又私を、菓物を取り、又花を、

取、與
自、與

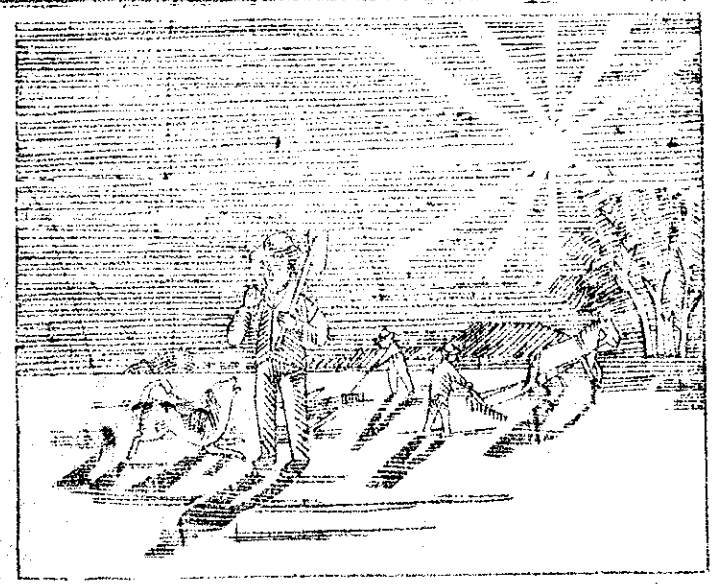
取りて與ふべし故に小兒を自ら取るべし
といふも此人の教へに従はずして自ら花
を折りたらむ再び花園に來るを得ざるべし

白瓜
梨子
蔓
其影
大陽

茲に、菓物を積み入れたる籠
あり。○此菓物も、白瓜と、葡萄
と、梨子なり。○籠の外に、掛り
たるは、葡萄の蔓なり。○籠の
左に其影あり、然れを汝も、大
陽のある方を、知りたるや。○
大陽も、籠の右にあるべし



今、日
晴、氣
天、氣
露、葉
農、夫
野、夫
畑、夫
擔、夫



日の出を見よ。○今日も、晴れたる天氣なり。○鳥
が鳴きて水より水に、飛び移れり。○草を食むと
して、葉に露を持てり。○數
多の農夫も、野に出で、或
は畑を耕し、或は草を刈れ
り。○一人も、鋤を擔ひて立
てり。其傍に犬あり。○これ
も、彼の畜へる犬なり。○
晴れたる天氣にも、必ず野
に出で、働くものと知る

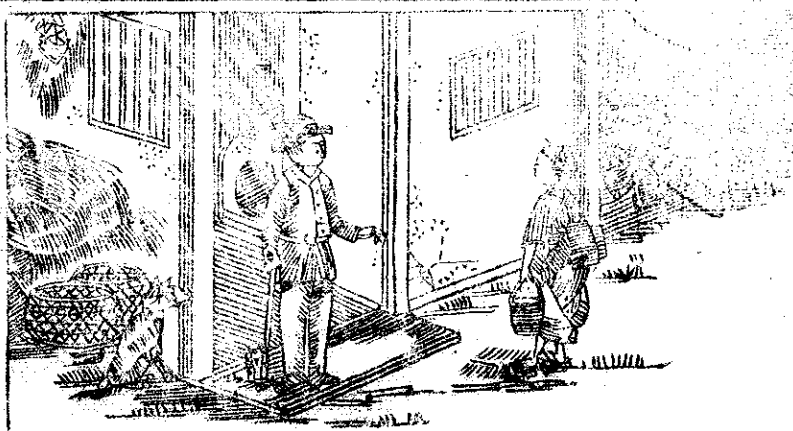
大
野
夫
畑
夫
擔
夫

日中 照處 煖 樹蔭 較涼 臥 凌 水飲 河上 橋 晝飯

今日日中次なりたり。○大陽の照らす處も、甚だ煖なり。然れども、樹の蔭を較涼き處に臥したる牛と、正ちたる牛あり。○又一匹の牛も、煖々きを凌ぐ爲に、河に行きて、水を飲まんとす。○河の上に、橋あり。○人を皆、日中になりたれを、晝飯を食する爲に、家に入りたり。



日暮 歸來 牛 乳絞 十分 乳汁 甚忙



日暮になりたり。○人を、野より歸り來り牛を、庭にあり。○一人の女、庭に出で、牛の乳を絞り、手桶に十分乳汁を得たり。○此女、牛を新しき乳汁を飲むことを好み。○汝も、戸の傍に、犬のあるを見たりや。○此人々も、甚だ忙しき人と思ふや。○日暮になりたれを、今日、変りたる草を、積み入る、爲に忙しきなり。

鷹

高山
岩間

平野

夜中

鷹は、尤つよき鳥にして、他の鳥の、恐るゝものな
 り、○鷹は、高く空中に飛び
 行く、○高山の岩の間、又え
 茂りたる、大木の枝に、巢を
 作るものなり、○されども
 食物を得る爲に、平野に出
 て、來ることあり、○今雀を、捕り來りて、雛を養ふ
 を見よ、

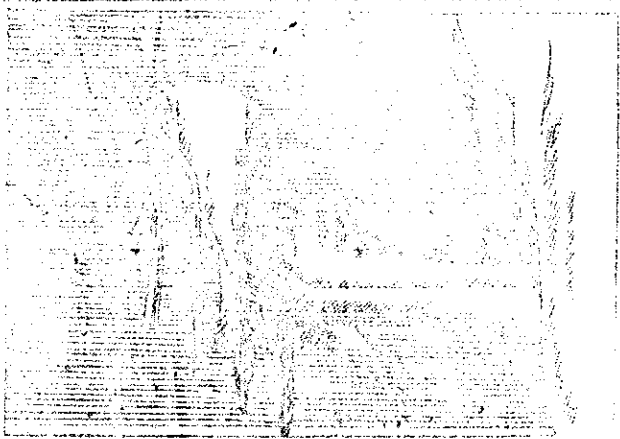


天津神は、常に我を守り給へるゆゑに、私を、獨り
 にて、暗き夜中に、歩行するも、恐るゝことなし、○

獨
暗
眠

見
給

忽
蒙
罰



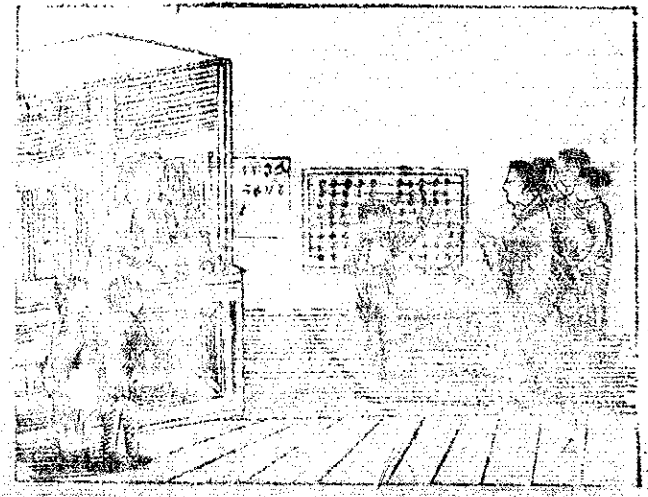
眠りたる時も、神は、守り給へ
 るを以て、暗き所に、獨り眠るも、
 恐れなし、○暗き所にて、神は、能
 く見給へるを以て、人の、知らざ
 る所は、ても、悪しきことをなせ
 る、忽ち、罰を蒙むるものなり、○
 人の、知らざることにて、神は、
 能く、知らざり給ふて、善きもの
 にも、幸を與へ、惡しき
 ものにも、罰を與ふ

第七回

數得

林檎

云く物を數へ得るや、○もし父が汝に、林檎を十
 一與へ、母が汝に、林檎を五つ、
 與ふるときは、汝は幾つの林
 檎を得るや、○十六の林檎あ
 り、○汝等も物を數ふること
 を學ぶべし、○大なる數と小
 き數を知るべし、○汝は石盤
 又紙に、數字を、書き得るや、
 ○もし數字を、書き得ぬらば、考りて之を書き、
 ことを學ぶべし、○物の數を知らざるを思はる



机上

人なり、



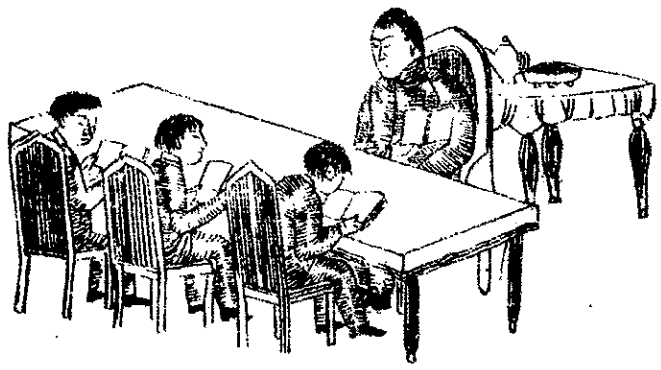
机の上に、十一の梨あり、この中
 三つを、母が持ち去りたり、然る
 ときは、机の上に残りたる梨子
 を、幾つとなるや、○残りたる梨
 子、八つなり、

文字
書得
贈書状

汝等も、文字を、書き得るや、○
 文字を、書き得ざるときは、人
 に書状を贈ること能はず、○
 このゆゑに、汝等も、文字を、書



くことを學ぶべし



汝等も文字を讀み得る事
文字を讀むことを知らざれば
人より贈りたる書狀を讀
むこと能はず○書物を讀む
こと能わざれば事を知るこ
となし○見よ事を知らざる
人を智慧ありとも物の用に
立ち難し○ゆゑに文字を讀
むことを知らざれば愚なる

智恵

馬入獸陸荷 誠用類地物

人となるなり○汝等を勞めて、文字を讀むこ
を學ぶべし

馬を誠に入用なる獸類にて、
陸地にて、荷物を運ぶに、毎
日入用なり○馬も女なる獸
類にて、長き顔あり○立髪あ
り○背の上に、荷を負ひて、遠
方に、送るものと、人を載せて
走るものと、車を引くものあり、



牛も馬と同しく、入用なる獸類にして、能く車を

干肉

牝牛

衣裳織物
黒羅紗
羽織

引き又え荷を負ひて、遠方に送るものなり。○されども、牛を人に乗せて、走ること能はず。○牛の肉を食物となりて能く、養ひをなす。又牝牛より、乳汁を取ることを得るなり。

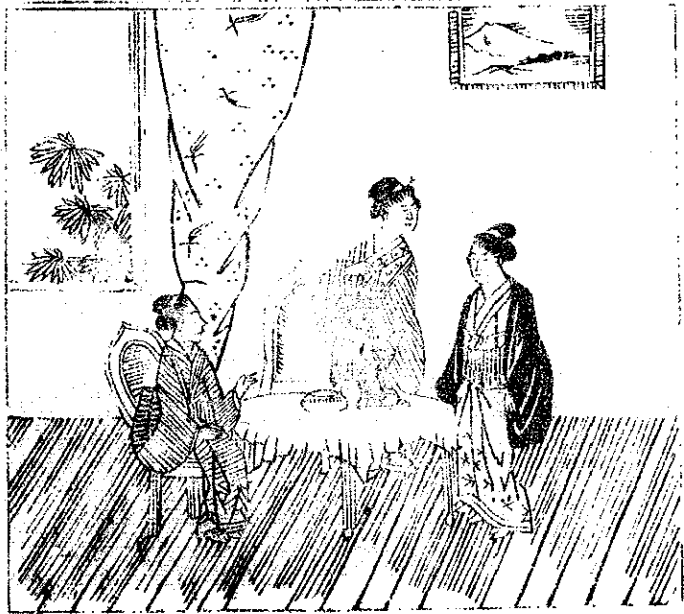


汝の着たる衣裳も、何と云ふ織物なるや。○黒羅紗の衣裳なり。○私の羽織も、黒羅紗なり。○汝も

木綿

毛織物

紺色
紺色
紺色



絹と木綿と羅紗の中、何れが第一に暖うなりと思ふや。○羅紗も、毛織物なれど、第一に暖うなり。其次に、暖うなるもの、木綿なり。絹も、又其次なり。○絹も、柔うなれども、身を暖むること少し。

茲に、白き単衣と紺色の単衣あり。○汝も、何れを第一に暖うなりと思ふや。○白き色も、太陽の熱

夏涼
冬寒

白衣

道理

二枚

を引くこと少きゆゑに、夏も涼しければ冬も寒し、
 ○紺色も、太陽の熱を能く
 通ほすゆゑに、冬も暖うな
 れども、夏も熱し。○見よ人
 や、夏も多く白衣を着、冬も
 多く、紺色の衣裳を着るこ
 とを、この道理あるゆゑな
 り



茲に、二枚の圖あり、皆人の、働く所を画さけり。

脛用
現

稻
麦



初の圖を、野に出て、
 種を蒔く所なり。○こ
 の人を、携へたる籠に
 種を入れたり。この人
 の、肘も脛も現れた
 り。これ、熱きとき、日
 中に出で、働くゆゑ
 なり

次の圖を、稻を麦りて、我家に、持ち歸る様なり。○
 又稻を打ちて、米を取る所を見るべし。○此人々

汗、流、地、落

農、夫

苦、勞

蠶、育

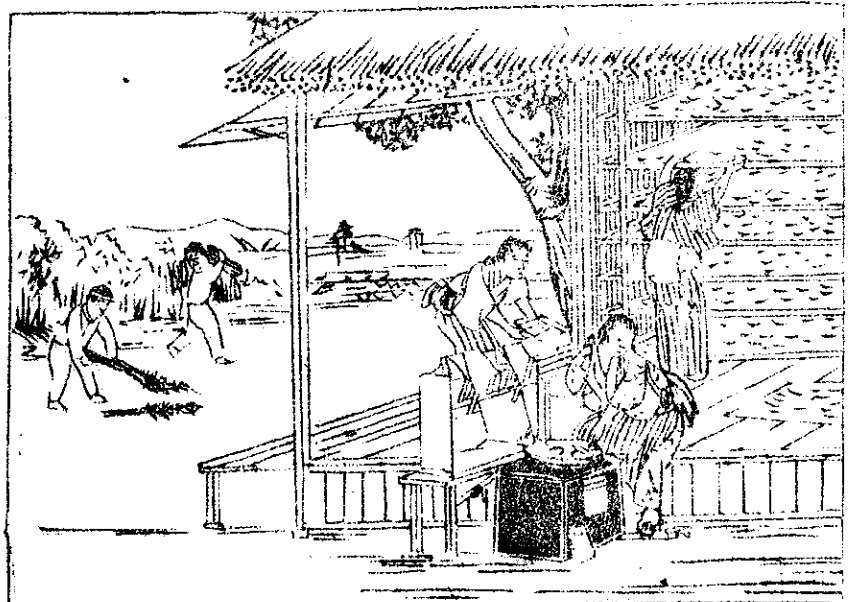
糸、取、朝、早、起

の汗を流れて、地に落つるを見よ。○農夫は個様に、働ろぎれを、穀物を得ることなし。○汝等常に穀物を食するとき、農夫の苦勞を念ふべし。



桑葉、取、摘、男、此

蠶、飼



あり、桑を取り、葉を摘む所なり。○此男は野に出で、耕す人と同く、肘も、現え、汗を流して、働けり。○個様に、数多の男女が、苦勞して、拵へおれむ。糸もなく、頼もなし。○汝等、曝々なる衣裳を、着たるとき、必ず蠶を飼ふ人々の苦勞を、忘

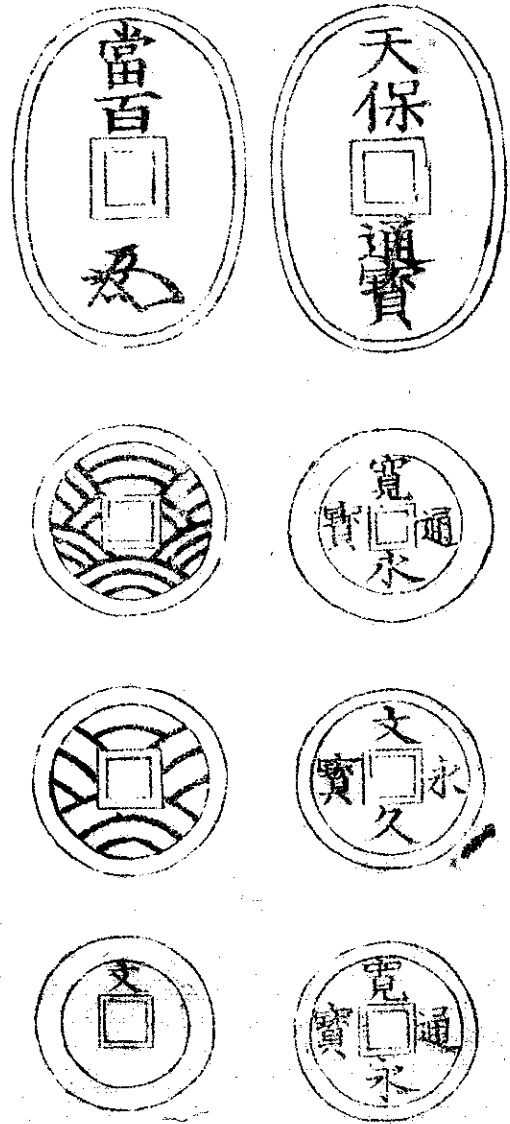
貨幣

るべからず

茲に種々の貨幣あり

四品
幕府
錢

右四品の貨幣を錢といふ、徳川幕府のときより

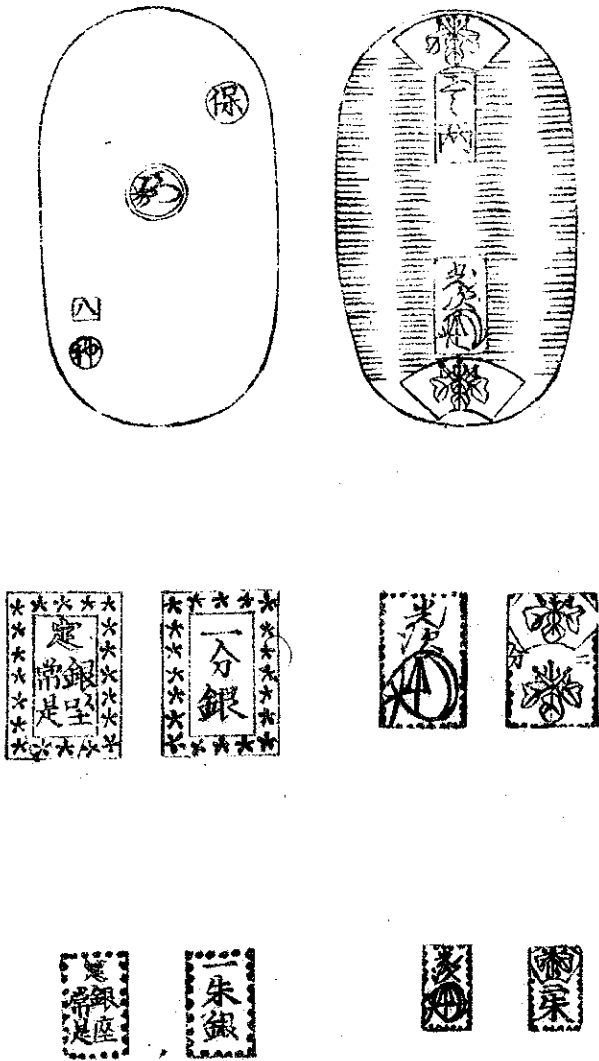


通用

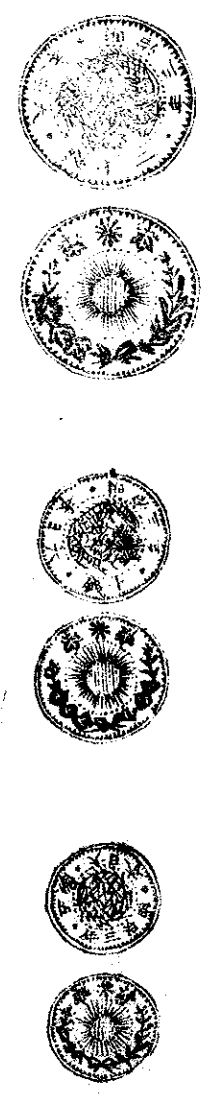
今日までも通用するものなり

金

此五品の貨幣を金といふ、徳川幕府のときより

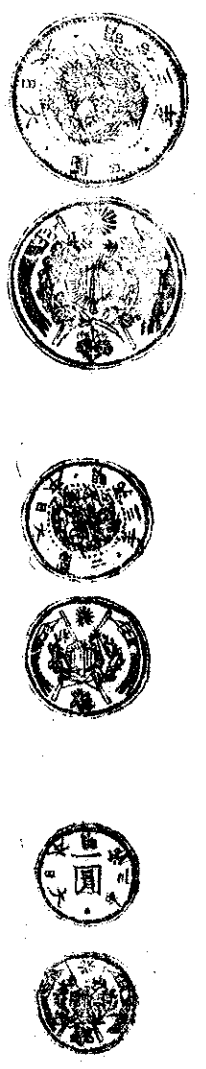
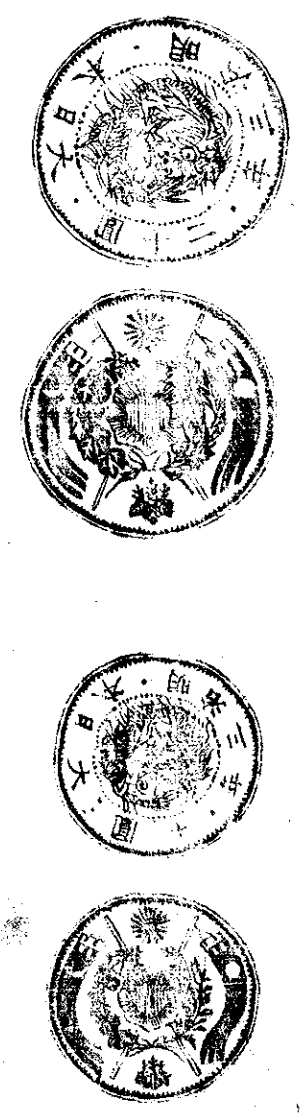


の通用金なり、



銀貨幣

右五品の貨幣を銀貨幣と云ふ

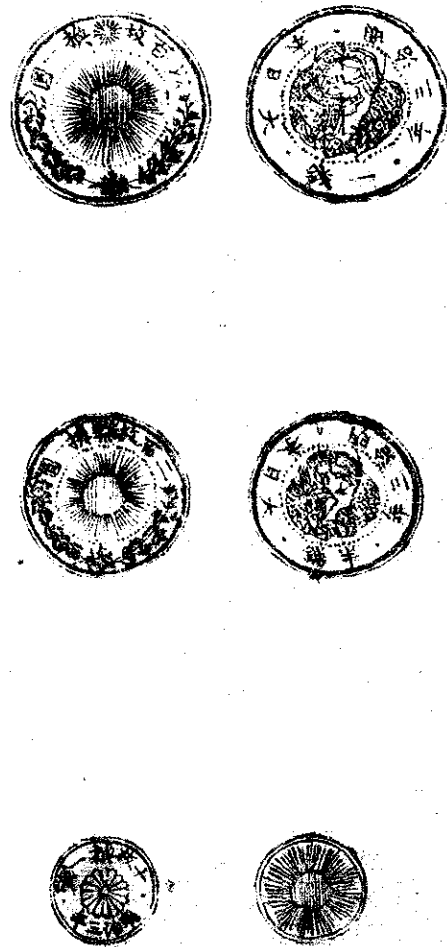


右五品の貨幣を金貨幣と云ふ

一發政銅

般行府

右三品を銅貨幣と云ふ
此三種の貨幣を政府の發行にて當時一般通用



分朱圓

の品なり

錢一文を、毛といひ、十毛を一厘といひ、十厘を
一錢といひ、百錢を一圓といふゆゑに十二錢半
を、金二朱に當り、二十五錢を一分に當り、五十錢
を二分に當るなり、

